

和牛講座〔7〕

千屋種畜場 嘉 寿 技 師

14. 和牛の管理

一. 哺乳仔牛の管理

一般管理の前に分娩より離乳までの順序を簡単に説明し、その都度注意を加えつつ進みたいと思います。

最初仔牛ですがそれより分娩のことについて述べます。分娩と言うことに成りますと当前親の症状が問題に成って来ます。即ち分娩一週間前位では薦坐靱帯、外陰部が弛緩して来る外、乳房は勿論膨満します。又一般に動作（運動）緩慢になるのが見られます。分娩1-2日前に成ると粘稠粘液が流漏し始め、外陰部は潮紅、湿潤と成り、乳を搾ると黄色乳汁物（飴乳）を分泌します。

分娩12-24時間前では殆ど正常な白い乳様汁を分泌します。特に乳量の多い牛等に於いては自然に流出するものもあります。その外挙動不安に成り食欲も不振で稀に陣痛が起るのが見られます。そして陣痛が30-60分間位続きますと第一破水が起ります。これは尿膜が破れるのですが俗に一般農家では湯がこぼれると言われているものです。

第一破水から30-90分位しますと第二破水が起ります。之は羊膜が破れるのであります。

この第二破水から20-30分の内に愈々分娩が行われる訳なのです。その2時間の間親牛は陣痛や努責があり不安の状態から哀鳴する牛もあります。分娩の際前肢と頭を揃えて出る正常位の場合は宜敷いが余り時間が掛るとか前肢が1本丈しか出ない様な時には至急に獣医師の助産が望ましいことです。時に羊膜を被った儘娩出することがあります。この様な場合必ず牛の傍を離れないで居て急ぎ窒息しない様に鼻先の膜を破ってやるのが大切です。俗にこれを包仔と言って不注意の為良くころすことが有ります。

分娩後親牛には良く麩湯やアルコール等を与えて元気付けますと共に渴をうるおしてやります。分娩後、仔牛を良くなめない牛が居りますがこの様な時には麩等を仔の背中等に掛けてやると良くなめる事があります。又特に初産に多いのですが仔牛をおそれて突き廻す牛が居ります。これは仔牛の動くのがおそろし

いのですから母親を繋いで乳をのませるとか、なれるまで分けてやるかしないと仔をころすことがあります。

乳付の時にも同様な牛が居りますので良く注意した方が良いでしょう。

分娩後和牛では大体30分前後で起立します。60分位たちますと初哺乳を行う様に成ります。仔が少し虚弱な場合等初哺乳時助力してやることも結構です。

後産ですが和牛では分娩後3-5時間位したら自然に娩出されるのが普通の様です。これは大体生産地の余り良くない牛の場合ですが栄養が良いと少しこれより早いのが普通でしょう。後産も半日位しても出ない場合は大体停滞するものとして考えて良いでしょう。この時は一般人では摘出は不可能ですから獣医師に依頼します。最適の摘出期日は冬で3-5日目、夏で1-3日が良いでしょう。

乳利用の面から今後和牛界も研究し活用の余地がありますが乳牛と同様分娩後1週間位までを初乳と言い飲用には不適當です。この期間乳が多過ぎて張る様でしたら搾ってやらないと乳房炎等をおこすおそれがあります。

普通1週間位から親仔共に放牧することが出来ます。昼夜連続で放牧するということになりますと矢張20日から1カ月はたたないと危険です。仔牛は20日位から舐食するものもありますが當場では大体3カ月より別飼に移ります。その場合親が仔の餌を食べない様隣房か別舎で飼います。仔牛が普通発育している場合は6カ月で離乳します。保留し繁殖等に供する場合は一般的には7, 8カ月まで離乳しない方が仔牛の為には良いでしょう。

二. 仔牛の管理*

離乳後の仔牛の管理上の根本的な要因としては骨格を作るということが一番大切なことです。

それには先づ運動で放牧場又は運動場に放すか毎日曳運動をします。過度の放牧又は急峻すぎる放牧場への放牧は避けた方が良いでしょう。日光浴は特に暑い

岡山畜産便り 1956.03

日以外は戸外に出して日光に充分浴させます。放牧もせず運動場へも放さない場合には1日2時間位戸外へ繋留します。肢勢を正しくするには肢の立ちが正しくないと正しい体が出来ません。それにはたびたび削蹄をし運動をして蹄を正しく保ち、留繋に際しては、首を正しく保持して立てるように繋がります。

なお当方の仔牛及び生後18-20ヵ月までの2才の牛に対する一般的管理として、次のような管理が大切です。

(イ) 手入れ—一般牛でも必要なことですが仔牛には殊更大切です。毎日手入れをすることによって、人と牛の融和が出来牛の性質がよくなります。調教したり、使役するにも毎日手入れをしている牛は非常にやり易いのです。毎日金櫛で毛についている糞や土などを落とし、皮膚の垢を起します。その後で毛櫛をで垢を拭いとしてこれを金櫛へこすりつけてかき落とすのです。毛櫛をかける前に藁束で全身を摩擦してやれば一層結構です。

(ロ) 蹄の手入れ—削蹄は勿論ですが川入もします。川は肢の膝位の深さの処がよろしい。川の中を歩かせますと蹄間が清潔になります。削蹄と川入れと運動の3つ揃って初めて立派な蹄が出来、正しい肢勢を生じ、正しい肢勢の牛ではじめて立派な体が出来ます。

(ハ) 矯角—角を放って置くと、横へ出たり、前へ向ったり、後へねたりします。和牛の角は大体上向しているのがよろしい。これは見た目がよいのみでなくて、管理にも都合がよいのです。生後5、6ヵ月頃から14、5ヵ月頃までの間に時々角の方向を直すのがよろしい。普通のものには内へ寄せるのみでもよろしい。それには丈夫な長い布片の様なもの両方の角へ巻きつけて締めます。あまり締め方がきついと牛が頭を振って嫌がります。又余りゆる過ぎると全然効目がありません。時々頭を振る程度がよいようです。角の小さい内は1日位寄せて止めます。12ヵ月を過ぎた牛ではなかなか寄りにくくなります。ことに太い角やオスの角など寄りにくいので3日ぐらい寄せます。寄り具合に応じて締める加減と日数とを加減します。

角の出方によりますが、メスでは「い」の字形、オスでは逆「ハ」の字形というような形に完成するには生後14、5ヵ月までの間に数回寄せます。要するに形を見ながらやればよいと思います。

(ニ) 角磨き—なお角の美観を添えるために、角磨きをする事が有ります。之は放牧地帯では不必要なことで角上皮を取って自然に磨かれた様に角地を出すことです。これは生後15、6ヵ月になってから行います。

(ホ) 鼻木通し—鼻木を通す年令はオスでは生後8-12ヵ月、メスでは9-14ヵ月が適当です。堅木で作った、先の尖った丈夫な穿孔棒で孔をあけます。先ず無口で、牛を柵のような丈夫な槓棒に縛りつけて置き、助手に牛の頭をしっかりと抱かせて置き、術者は左手の拇指と人指指とで、鼻木を通す部位を掴み、鼻中隔軟骨の前で一番膜の薄い部へ、右手に持っている穿孔棒をねじ込むように一気に通すのです。充分に大きい孔があいたら、棒を抜き、その穴へ止釘を外した鼻木の曲木を通すのです。そして通した曲木を台木へはめて止釘を刺します。通した鼻木は頬綱で、吊して置きます。頬綱の締め加減は鼻木の台木を持って起した場合、それが牛の鼻と直角になる程度がよろしい。鼻木の大きさは、当才の時には台木の長さが100mm、成牛では13cmぐらいがよろしい。

三. 調教

(イ) 年令—調教に適した年令は生後14、15ヵ月-24、25ヵ月で鼻木を通してから少くとも2ヵ月を経過している必要があります。

(ロ) 時期—時刻場所、時期は何時でもよいですが出来れば、酷暑、厳寒の候は避けましょう。虻や蠅が多いと能率が上がりません。

時刻は空腹及び満腹時を避けるべきです。発情時期も良く有りません。人、車動物等のあまり通らぬ静かな場所で平らな道又は片側に垣や壁のある場所がよろしい。

(ハ) 追綱—頬綱、追綱は大人の小指位の太さで、長さは約4m位を要します。これを鼻木の台木へ、左右頬綱の中央で結びつけます。

調教するには、追綱の端を80cmないし1m残して右手1回廻して握ります。頬綱は、小指位の太さで長さは1.5-1.6mを要します。2つに折ってその中央を結び、こぶを上側にして鼻木に縛りつけ、両側を耳の下に廻して頭で結び合わせます。

(ニ) 綱の打ち方の練習—牛へ急に調教をする前に、追綱の一端を柱へ縛りつけて置いて、綱の打ち方を練

岡山畜産便り 1956.03

習します。先ず綱が一直線に軽く張る程度の位置から、平首とこの腕とを用いて綱に縦の波を一つ立たせ、その波が、スーッと綱を伝って柱の所へピンと当るように打って見ます。この綱がよく打てるようになったら、次には、手首とこの腕とを左へ振って横の波を立たせ、この波が綱を伝って、柱を打つようにします。この縦の波は牛の頭と頸を上げさせるに使い、左横への波は左回転をさせるのに必要なのです。この練習が充分出来る様に成るまで繰り返します。

(ホ) 調教者の心掛

(A) 一つの科目を教え初めたら牛が覚えてしまうまで止めないこと。

例えば、並足で歩くというような動作を教え初めたらそれが完成するまで止めてはいけません。

(B) 全精神を打ち込むこと。出来ないからといって

決して怒気を発しないこと。うまく出来た時はすかさず賞めてやること。これには頭や股の間をさすりながら、おだやかにオーラ、オーラ、と声を掛けてやりま

す。
(C) 逆らう時には“コラ”と強く短く叱り、綱を強く鼻へ当てつつこらしめる。但し決して怒気を感じさせてはなりません。

(ハ) 調教者の位置と姿勢—調教者は牛の右側で、右後肢の一步半斜め後に位しているようにします。この位置から追綱で軽く緊張しているように右手で握り、追綱の残りを左手に握って牛を励ます時等に握りま